

特集：外崎長三郎先生

小学部の絆

元小学部教諭 阿部光子

昭和18年春、当時小学部の部長でいらした外崎先生から「今、小学部の教師が1人欠員になっていて、その補充をと探しているが時節柄ミッションスクールに就職を希望する者がなく、困っているので来て欲しいんだが。」というお話があった。かつて郷里の女師附属小学校に勤務していた時、先生と御一緒だったので、私のクリスチャンであった事を御存じの上でのお招きとお受けする事にし、4月から英和の教師に加えて頂くことになった。私にとって私立校は初めての経験なのに特別の御注意もなく1年生担任と決められ、教室に籠もって生徒達の事に専念することを許された。併し先生は学校管理の重い責任をお持ちで、細かい事に迄お心を配っていらっしゃる事を見せて頂いた事があった。それは、新学期が始まって間もなくの或日、先生とご一緒に玄関を出ようとした時、事務室にまだ残っていらした大野宇良子さん（この3月に青山学院の神学校を卒業されて、事務室に勤務）に声をおかけになった。「大野さん、遅く迄ご苦労さん。事務室の仕事はね、ご父兄との応待ばかりではなく、先生方の帰られた後の校内の見廻り等もあなたの仕事。あなたは学校のお母さん役なんだからね。宜しく頼みますよ。」と、そのお言葉に先生が若い方々をこうして育てて下さるんだなと感激した。この方は後に牧師と結婚

され、教会のよきお母さん役で信者さん達にも行届いたお世話をなさるので、現在も皆さんに慕われる牧師夫人でいらっしゃる。

外崎先生はお若い頃、青森県の藤崎町の教会で、藤田匡牧師（盲目でいらしたが、非常に靈的なすばらしい牧師）のお導きで信仰を与えられ、養われていらした先生。

18年の暮頃から日本は次第に戦時色が濃くなり、クリスチャンに対する圧迫も激しくなってきた時にも先生は毎朝の礼拝は欠かさず行なわれ、放課後の職員祈禱会も続けて下さった。しかし昭和19年に入ると、いよいよ戦局が悪化し東京空襲の危険に備えて疎開の話しが起こり、永和の父兄の中にも安全な田舎へと移られる方が多くなってきた。その頃先生はこの情勢についてどんなにかお心を痛め悩んでいらした事が知れない。職員室の中のガラス戸で仕切られた狭い部長室の中で祈っていらっしゃるお姿をよくお見かけした。

この7月に入ると、いよいよ学童の集団疎開が都の方針として打出され、永和でもこれに対処すべく、先生は大変な御苦労をなさった。（詳細は先生の御報告として「史料室だより5号」に）疎開地割当て最後の区役所からの呼び出しで、お出かけの時、放課後職員室に残っていた故中沢先生と私に「祈っていて」と云い残されて区役所へ



“外崎先生米寿の集い”で、ご挨拶をされるお元気な先生。1991年3月

かわれた。疎開地としては最も条件の悪い山奥のお寺という割当を受けていらした先生は、見るもお気の毒な程、力を落としてお帰りになった。私共2人もすっかり気抜けして机の前に座りこんでしまったが、気をとり直して又部長室へ入り、3人で心を合わせて神様の御憐みをお祈りした。

「神様はどんな災禍をも善に代えて下さる」との聖言葉を頂いて、やっと帰宅。こうした悪条件の中に出発した永和の疎開に対して神様は、私共の思うよりも願うよりも勝った御恵みをお与え下さった。それは此の不便な疎開地は空襲の激しくなった時には、最も安全な場所となり、父兄も本当に安心な所と確認して喜ばれた。斯うして無事に疎開地から帰京した永和は此の後もこのお寺との交流が続き、楽しい夏期学校の開催地としても何年かお世話になった。又疎開児童だった生徒も10年、20年、30年と年を経てその当時を思い起こし、その節目毎にこのお寺に対して感謝の訪問を続けることが出来た。なおこのお寺のお嬢さんは、英和の中等部へ入学なさるとい嬉しい御縁も出来たのだった。

先生は疎開地から引揚げられて、お住居も定ま

らず、校庭の隅にあった車庫が仮のお住居だった頃から、郷里から上京して来る教え子達を御案じになり、あの仮小屋のようなお家へお呼びになって、進学から就職のこと迄、色々とお世話をしていってらっしゃった。此の教え子達の中には、私が低学年で受持った生徒さん達もあったので時々、あのお住居へお邪魔し、楽しい語らいの時を持たせて頂いたこともあった。年毎に先生をお頼りして上京する生徒の数も増えてきた時、たまたま青森では集まれない同窓会の話（戦争最後の頃の空襲で母校は灰燼に帰し、更に教育制度の改正で、名実共に青森県女師附属小はなくなっている。）が出たので、それでは在京同窓生の集まりを持つと大正時代から上京している先輩にも呼びかけ、外崎先生のお世話で東京女附会が誕生。こうして毎年100名以上が集まる楽しい同窓会が続けられている。

その他先生は色々な集まりに関係をお持ちになられ、誠意をもってその一つ一つの集まりの纏め役になって下さるので、よい会が幾つも残されている。その最大の纏め役を果たされたのは郷里の東奥義塾が創立以来の大事業である校舎移転新築等の節目にかかり、色々な問題が起こって、その纏め役として先生が義塾からお招かれになり、これをお受けになった時であろう。先生はお年を召していらしたにも拘らず御赴任になられた。それは歴史あるミッションの学校を何とか立派に盛りたてたいとの念願をお持ちの先生は篤い祈りと真心とを持ってこの難関に取組まれたのでであろう。3年半の歳月をかけて校舎移転再建にまで纏め上げて東京へお帰りになられたのである。

なお1991年春、小学部の卒業生とお母様方で外崎先生の米寿のお祝いの会が催された。かつての教師の私共も出席させて頂き、その席上で1人の

教師が「今日は、まるで小学部の同窓会でもあるように、懐かしい昔の卒業生から若い年代の方、お母様方までがこんなに大勢お集まり下さって私迄本当に嬉しうございました。これからもこんな小学部の同窓会が出来るといいと思いますが。」との御発言があったが、その実現に至らず、先生

は神様のお召しで天国へお帰りになってしまわれた。先生と最も深い関係を持って頂いた小学部の同窓会はお纏め頂く事も出来なかったが、外崎先生を中心に結ばれた小学部の絆は皆の心の中に永久に続くことを信じている。

外 崎 先 生

元小学部教諭 堤 治 子

外崎先生の思い出は……とおっしゃった時、私はいつもエネルギーに仕事をしておられた先生を思い出します。先生は、素晴らしい教育者であったと同時に、学校経営者でもいらしたと思います。東洋英和の小学部が今日の様に有名になったのも、時代の波とは言え、先生のお力によるものと思います。先生はいつも、「英和の長い伝統をかえりみつつ、前途を望み見る努力をしなければいけない。伝道の固定化ではなくて、成長発展への努力を求めていかなければ……。」と言っておられたのを思い出します。そして、先生はそれを一つ一つ実現して来られました。小学部に独立校舎が与えられました。又先生のなみなならぬ努力で、素晴らしい先生方も与えられました。小学部は立派に独立して歩き出したのです。先生は深い信仰の持主でいらっしゃいました。先生はいつも全校のために、生徒のために、又私達教師のために祈って下さいました。私も先生のその熱い祈りにささえられて受洗した一人です。受洗の時いただいた詩篇51篇17節の「神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心をかろしめられません。」このみことばはい

つも私の心のささえです。

先生は神様の深い御愛を子供達の家庭にもと、母の会を対象とした伝道集会の様な、“聖書の会”を作られました。三崎町教会の山北先生をお迎えして開かれ、いつもお母様達はあふれるばかりのお恵みにあづかりました。ある会の終わったあとのお茶の会の時、「この様な会を作るのは私が戦前から抱いていた執念とも言える長年の念願でした。」と言われ、山北先生と手を握り合っておられた先生のお姿を、今でもはっきり思い出します。先生は、時間の許す限り出席されて、お母様達の後でメモを取っておられたお姿がとても印象的でした。

外崎先生と言えば軽井沢の追分寮……。先生と追分寮は切り離す事は出来ないのです。先生がいらしたからこそ追分寮は出来たのです。それまで小学部は夏休みの夏期学校を、御殿場のY M C Aの東山荘、軽井沢の星野温泉などなど、夏休みのために1年前から頭を痛めていたものでした。4年生以上だけでなく1年生から……。とそれが私達教師のたつての願いでした。それが先生のなみなならぬ努力のおかげで追分寮が完成して1年生から学年に合ったプログラムで夏期学校を迎え

る事が出来る様になったのでした。今この思い出を書きながら、先生と御一緒に軽井沢の土地を見に行った時の事、建築中の寮をみて感激した事、寮のカーテンを縫った事など思い出が走馬燈の様に頭をよぎります。

先生は楽しい学校作りをいつも考えておられました。どうしたら子供達が目をかがやかせて受けられる様な楽しい授業が出来るか……。私達教師

の授業にも特に力を入れられて、やさしく、きびしく、適確なアドバイスをあたえて指導して下さいました。私の長い英和の生活の中で先生と御一緒にすごした日々は、信仰の面でも、又教師としての自覚の面でもほんとうに先生に感謝することばかりでした。先生が大切にしておられた“敬神奉仕”の美しい英和のカラーが失われない様祈っております。

外 崎 先 生 へ 感 謝

いずる
出流会代表 澤 暢 子
なが
(旧姓 三代川)

「ピンポンパンポン」食事を知らせるチャイムの音が、谷に響いて楓寮へ届きます。夏は青紅葉の重なりの下を、秋、あけびは紫の実を手の届かない高い枝に、冬、つららの下がった水道管の脇を、そして春、萌え立つ草いきれの中、私達4、5年生は山道を降りて桜寮へ食事に行くのです。滝の音を聴きながら1日3往復、自然の中の森林浴が健康に多大の効果を齎らした事と思います。

昭和19年8月、東洋永和女学院付属初等科生徒約80名は、担任や養護の先生、寮母さん達と共に、外崎先生の御引率のもと、栃木県出流山満願寺へ学童疎開しました。厳寒の地、副食物無し。指定場所出流の説明書を見られた時、食糧の確保に就いての御心労は筆舌に尽くし難いものがあったと後に伺いました。

日々の生活は、朝の乾布摩擦に始まり、掃除、身じまい、礼拝、授業、編物。運動はドッジボールや馬跳び、薪拾いを兼ねた登山。道々秋海棠、しゃが、ドクダミを覚え、毎晩のお楽しみ、松本先生の読んで下さる講談で歴史に強くなったりと、

食糧事情以外は盛り沢山なもの。遊びの中で知らず知らずの内に勉強した事が多く、精神面でもお互の協調が大切で、譲り合い助け合いの中に問題を解決する方法が自然に身に就いたのも大きな収穫でした。

お祭に村の家へ招待されたり、葛生への遠足のお弁当はゆでじゃが2つ、でも山百合が綺麗でした。シンガーソングライターの歌の指導、学芸会等、外崎先生の掌の上で、のびのびと毎日を過ごせた体験は、この後の人生の中で、あの時我慢出来たのだからこの位は辛抱出来ると言う不屈の精神を植え付けられたと言う点で、生きた教育をして頂いたと感謝して居ります。

1年2ヶ月経ち、昭和20年10月焼野原の東京へ帰り、六本木の交差点に立ち、辺りを見回して改めて戦争の恐ろしさを知ると同時に、遊び場だった千手観音堂の庭で、キーンと晴れ渡った青空高くB29の銀色の機影を見たのは数える程しか無くそれ丈け深い山の中に守られていたのだと感慨無量でした。

その後、疎開地訪問30周年40周年は、親や子も加え沢山の参加者と共に行なわれました。企画、指導、後日談プリント配布迄、全て外崎先生のプロデュースに依るものでした。

今よりずっと長く感じられた1年2ヶ月、杉木立、風の匂い、焚き火の煙、満天の星空、緑の山々、優しくお世話して下さった先生方への想い出と共に、出流は私達の第二の故郷となりました。

40才早々の働き盛りに、私達生徒を見守り、飢えさせもせず、生活の方向付けを指導して下さった外崎先生は、あの当時私達全員の父親として家長の座を立派に守られた事に心からの感謝と尊敬を捧げます。

鳥居坂教会の御葬儀の日、先生の教育者としての業績を讃え、沢山の方々が弔文を読まれた中、長い御生涯の内でも出流の御経験は強烈なものであったろうと、そのお心を思い涙を拭きました。



誰もがカメラを持っていなかった時代の貴重な記録写真の一枚。栃木県下都賀郡寺尾村出流山満願寺での学童疎開中の一コマ。

外崎先生有難う。私達は先生の御恩を忘れません。と心の中で呼び掛けました。

先生！お約束の疎開地訪問50周年は、もうすぐですよ。
(昭和22年小学部卒)

出 会 い

—— 外 崎 先 生 を 偲 ん で ——

清泉女学院中学・高等学校前校長 中 里 昭 子

「外崎先生！」と声を張り上げて、皆がかけ寄っていかれる先生、小学生だった私たちが安心して近づくことのできる先生、その方こそ外崎先生でした。今にして思えば、安心して先生に近づけたのは、先生が神への深い信頼と、人に対する信頼に生きておられたからだと言えるでしょう。

私たち1942年（昭和17年）に卒業した者は、すでに戦争の時代に小学生となった、いわばミッションスクールにおいては例外的なカリキュラムに従っていかざるを得ない時に育てられた生徒でした。小学校の高学年の日々は、まさに変革期で、

小学校を国民学校とした政府の方針に従わなければ、学校の存続も難しい程に軍国主義一色に塗りつぶされた時代でした。キリスト教の精神を公けにすることのできないこのような状況の中で、私たちは先生方の心に秘められた深い信仰と愛を、個人的な多くの出会いを通して受けとめていたことは事実です。

一方、戦争も日増しにひどくなり、困苦欠乏に耐える節約の生活が、展開されていきました。先生も生徒も配給されるものを得て、「欲しがりません勝つまでは」という悲愴な相言葉を聞きなが

ら、日本の行く末を案じていました。学校農場もこの頃に開拓され、馴れない作業、楽しい「芋掘り」を経験し、外崎先生のご指導を受けたものでした。

1945年は、国内は最悪の状態になっていました。その年の3月、4月、5月、東京大空襲の際も「東洋永和」の校舎を守って下さった外崎先生は、キリスト者として、教育者として、物理的なことと同時に、一貫した信仰のもとに、「敬神」「奉仕」の精神をも身をもって守り伝えて下さったことは、東洋英和の歴史の中でも末永く評価されることと信じております。

先生が、戦争の時には特に生徒の将来について考えておられたことは想像に難くありませんが、『小羊』の8号（昭和17年）に載せられた記事の一部はそれを裏付けているように思われます。

「この子たちの成長の暁に思いをはせてみる。

（中略）大いなる世界史のうねりが今この子たちの眼前に展開しつつある。偏狭であってはならない。何でも日本第一主義でもいけない。明治時代が西洋文化を吸収した以上に諸民族が持つものを大きく抱擁しなければならない。

世紀の夜明けを翹望し、時代をつくらねばならぬ。この子たちの前途を思うや切なるものがある。」

さて、月日は流れ30余年経った時、幸運にも私は外崎先生との出会いに恵まれました。神奈川県私立学校長協会の総会での驚きと喜びは忘れられないものでした。先生も、そこでの再会をとっても喜んで下さったことは確かです。当時の先生は、平和学園の校長に就任されたところで、とてもお元気そうでした。その懐かしい出会いの後、先生は、私の勤務していた学校に立ち寄って下さり、興味をもって学校の事情、校舎のこと等を聞いて

下さいました。父親としての寛大な心をもっておられる外崎先生は、お年を重ねられるごとにますます円熟した先生になられ、私たちが年をとっていても、やはり「この子たち」として扱って下さいました。

1982年、仕事の区切りがついて、一年間海外へ出るようになった時、英和のクラス会に出席する機会がありました。その時も外崎先生は、私に小さな声で教えて下さいました。「今、この辺で皆さんに挨拶をしないよ」と。何と細やかなお心遣いでしょうか。やはり、私たちが50才になっても60才になっても先生にとっては「この子」であり「この子たち」なのです。本当に素晴らしい先生に出会うことができた私たちは、恵まれていました。

最後に、先生のお好きだった讃美歌の一部を歌いながら感謝の祈りをお捧げしたいと思います。

讃美歌 298番 信頼

1. やすかれ、わがごころよ、
主イエスはともにいます。
いたみも苦しみをも
おおしく忍び耐えよ。
主イエスのともにませば、
たええぬ悩みはなし。

讃美歌 509番 信頼

4. いざや別れんうき世に
いざや迎えんとこ世を
いざや迎えん主のみむねに
よりていこうその日を。

（昭和17年小学部卒）



東洋英和女学院小学部卒業生“小羊の会”による、外崎先生米寿の集いで、かつての教え子たちにかこまれて。この日この倍にちかい多くの参加者があった。1991年3月2日

歌 声

小学部音楽科 照屋美和子

東洋英和の小学部に私が勤めて間もないある日、礼拝の用意のためであったか、外崎先生の後について講堂へ向かう途中にちょっと振り向かれて、「この子どもたちの歌い方はきれいな声だがどうも弱々しくて困る、讚美歌をもっと大きな声で力強く歌えないものだろうか。あんた、やってみてくれないかね。」と、話しかけられました。

たしかに、礼拝で讚美歌を歌う子どもたちの声は、ただピアノに合わせて静かに歌っているというような、元気のない、子どもらしさの感じられない歌い方でした。

大学を出てまだ中学生をほんのわずか教えた経験しかなかった私には、それが易しいことなのか難しいことなのかも分からず、ただ外崎先生に課題を投げ掛けられ、これからそれに答えていかねばならないという思いでいっぱいでした。

当時の私には、歌を上手に歌わせるということは、ウィーン少年合唱団が頭声発声の美しい声で美しいハーモニーで洒落た歌い方をすることというようなイメージしか持っていませんでした。そこで私なりに努力し、美しい声を出させようと発声の訓練を試み、また、大きな声で元気に歌うように言葉で要求しました。その甲斐あってか、1年、2年と指導を重ねる内に、「大分声が出るようになったね。」と、少々甘いおほめの言葉をいただいたりもしました。

しかし、まだまだ力強さが感じられるような歌い方とはならず、外崎先生が望まれている歌声とはどこか違っているような不安がありました。

その後、私自身もう一度振り出しに戻って、イタリアのヴォイストレーナーのレッスンを受けたり、学校教育の中での音楽教育とは何かを勉強し



鳥居坂教会で外崎先生のお別れの礼拝。

たりする中で、どうやら光が見えてきました。

子どもたちに歌を歌わせる時が大切だろうか。

- 子どもがそこに居ると感じられるような子どもらしい歌い方をさせる。けっして大人の真似やひな形ではない。
- 子どもらしさを自由に、十分発揮できるような自然な発声をさせる。
- 歌う曲の内容と心を通わせ、イメージをはっきり持って歌えるようにさせる。
- 一緒に合唱している子ども同士の結びつきを持たせて歌わせる。

など、音楽の技術を教えるのが第一ではなく、音楽を使って子どもの心に働きかけ、変化させる。即ち、音楽を使って子どもを教育することであり、今までの表面的な美しさや表面的に大きな声を要求するなど、形の上から働きかけていたことから180度指導の方向を変えることとなったのです。

この方向で指導を始めてから序々に、子どもたちは歌う曲に心を通わせ、自身感動し内容を込めて歌うようになると、声も明確になり響きを増してきたのです。外崎先生に投げ掛けられた一つの課題により、私は歌唱指導での一つの方向、そし

て指導方法を探ることができたのです。

卒業した子どもたちから、小学部で心の底から大きな声で歌ったときの快感が忘れられない。とか、小学部で力いっぱい合唱したことで合唱することの喜びを知った。などと聞かされると本当によかったと思います。外崎先生が東洋英和にいらっしゃる間には、充分効果が表れていなかったのには本当に申し訳けないと思っております。

平成4年12月11日、鳥居坂教会で外崎先生とのお別れの礼拝がありました。小学部の5、6年生の児童160名がお別れに臨みました。そして、花々に囲まれた外崎先生のご遺体とにこやかなお写真に向って、感謝とお別れの気持ちを込めて「東洋英和の歌」を歌いました。

東洋英和の小学部の基盤を作って下さった先生そして小学部の総てをこよなく愛し、祈り続けて下さった外崎先生に聞いていただいた「東洋英和の歌」その歌声は、今まで私が指揮をして歌ってきたどの歌よりも、内面的で、とても美しい歌声であったと思います。

~~~~~ 外崎先生御略歴 ~~~~~

明治37年2月、青森県に生まれる。
大正12年、師範学校第一部本科卒業。昭和3年同専攻科卒業。
昭和16年2月～42年3月、東洋英和女学院小学部部長。
昭和42年4月～62年3月、NCC教育部主事、平和学園園長、東奥義塾長を歴任。

あとがき

小学部の基礎を創られた外崎先生が召されてはや10ヶ月。いろいろな世代に亘って、思い出を綴っていただきました。この「たより」を読まれた皆さまのうちにも、それぞれの思いがあることでしょう。 (幼稚園八木、小学部板橋・木口)